

仮面ライダームラサメ・スピンオフ/仮面ライダーシラヌイ

マフ30

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

古今東西より伝わる神話に伝説、物語や御伽噺などの伝承上にて語られる数多の怪物、戯我^{ギガ}。

色彩を食らう事で生きるその異類異形は、現世においても密やかに跳梁し、人草を脅かさんとしている。

そんな中、幾色もの超力と神魔の五体を纏いて、邪なる化生どもを調伏せしめる封魔の結社と仮面の狩人あり。

これは地方都市海良^{かいら}を舞台に戦いを繰り広げる荒ぶる白猿の戦士の外伝譚。

その名は——仮面ライダーシラヌイ!!

「冥土の土産だ。お前を絶景に塗り直してやるぜ！」

※本作品は正気山脈さんが投稿されている『仮面ライダームラサメ』(<https://syosetu.org/novel/277206/>)の-spinオフ作品になります。

詳しい世界観の設定や物語のあらすじ等に関しましてはあらかじめ、仮面ライダームラサメ本編を参照されることを推奨致します。

目次

第一頁 「愛謳う白猿は月下に叫ぶ」	1
第二頁 「麗しの放浪者（ストレンジジャー）は愛を訝しむ」	25

第一頁「愛謳う白猿は月下に叫ぶ」

真つ暗闇の空の下、若い女が踊にげっている。

迷い込んだ廢墟スデの敷地ヂをあつちこつちとステップ踏んで。

観客席には私だけ。

野良猫一匹いやしない、特等席を独り占め。

「助けて！ 許して！ 死にたくない!!」

今夜の獲物主演女優が高らかに歌わめっている。

泣いて、叫んで。叫んで泣いて。

心が躍るハーモニー。

月明かりのスポットライトがあるといいけど、今夜は駄目だな残念だ。

だから、おひねり代わりに彼女へとつておきの灯りをプレゼント。

大きく息を吸い込んで……ボオツとね。

「きやあああ!!? 熱い! 熱いつ!!? 炎が……なんで!?!」

私の口から飛び出した大きな火の球が三つ、四つと彼女を取り囲んで燃え盛る。

メラメラと燃え盛って、服を焼き、彼女の肌を炙っていく。

「ひいひい!!? 焼けちゃう! 死んじゃう!!」

じゅるり!

おっと、いけない。我ながら行儀が悪いな……ごちそうを前に涎を垂らすなんてね。

だがしかし、やはり人間が焼ける匂いは美味そうで食欲を刺激される。

直火ではいけない。じっくりと炙るのがコツであり、拘りだ。

さて、そろそろ今夜の女メをいただこう。

火炎地獄に苦しむ悶える女性の目の前に黒くぬめりのある表皮を持ったその異形は姿を現すと長い舌を持つ大顎をくわつと開いた。

炙り焼きにされて、悲鳴すら上げられなくなった女性は指先から光の糸のように解れて異形の口の中へと吸い込まれていく。

黒焦げになつて息絶えるよりも前に女性は怪物に色を食い尽されるとガラスのように透明になるや否や跡形もなく砕けて消えてしまった。

「ゲップウウ!! 美味しかったあ……気ままに流れてきてみたがこの界限は餌場としては当たりのようだ」

独白を最後に異形の気配は消え、再び夜の静寂が訪れた。

中部地方のどこかにある地方都市海良かいら——この土地の一步裏側は古くから危険と不思議が渦巻いている。

※ ※ ※ ※ ※

2022年4月下旬、新入生を歓迎するかのように咲き誇っていた桜が新緑の葉桜に移り変わり始めた季節。海良市にある海良高校にて——。

「モテてえ……」

昼休み。とある男子生徒は部室棟二階の隅っこにある部屋でだらだらと流行りの恋愛漫画を読み耽っていた。正規の部室と比べると手狭な元物起き部屋の扉には天文サークルと可愛い手製のドアプレートが掛けられている。

キリの良い場面まで読み終えたところで彼は感慨深げに本を閉じると憂いを帯びた表情で窓から見える青空を眺めると深い溜息を吐く。

「モテてえし、モミてえ……」

夢、期待、願い——ある意味で純粋な煩惱に塗れた戯言を少年は遠い目をして切実に呟いた。やや垂れ目で元気のあり余ったやんちゃ坊主な雰囲気を持つ栗毛の少年の名は朱里乱丸あけさとらんまる。この天文サークルの三人しかいないメンバーの内の一人だ。

乱丸が単行本をロッカーに戻したと同時に誰かが部室のドアをノックした。乱丸の返事を待たずに丁寧な所作で扉が開くと眉目秀麗と言う言葉がピツタリと似合いそうな爽やかな顔立ちの少年が勝手知ったると言った様子で入ってきた。

「いたいた。やっぱりここにいたね、乱丸にお客さんだよ」

「おつすー。俺に客？」

乱丸に気安そうに微笑む少年の名は黄瀬小太郎。きせこたろう

この天文サークルのメンバーの一人で部長を務めている一年生。成績優秀、スポーツ万能に加えて人柄も穏和という絵に描いたような優等生の人気者であり、乱丸とは親戚同士で付き合いも長い親友だ。「狭いところだけど、さあどうぞ」

「は、はい。お邪魔します。あの、はじめまして」

長椅子に寝転がって緩めた制服のネクタイを弄っている乱丸を尻目に小太郎は可愛らしいお客様を招き入れた。ボブカットに眼鏡という如何にも文学少女といった風の女子生徒は戸惑いがちに小さく頭を下げる。

「こちらこそ初めまして！ 朱里乱丸って言います!! 彼女はいますん!!!」

「ひゃい!？」

「炊事洗濯、飯作りと家事は一通りなんでも出来ます！ あと、次男なので婿養子も余裕でいけます！ どうぞよろしく!!」

女子生徒を視界に入れた瞬間に乱丸は途端に翡翠色の瞳に覇気を宿すと一足飛びで女子生徒の目の前に立っていた。そこから繰り出される熱の入った自己紹介&アピールはまるで熟練の一流セールスマンのように流暢で完璧な語り口だ。

「き、きもちわるい……っ」

「何故エ!？」

女子生徒の顔は青ざめて、握手を求めて差し出された右テには洗っていない三日目の雑巾を見るような眼差しが注がれる。乱丸の友好的な自己紹介はただ唯一、やる気の熱量が空回っているという致命的な欠陥を抱えていた。

朱里乱丸——恋と愛と綺麗な女性が大好きな自称恋愛マイスターを名乗る彼の学校内での異名は恋愛ゾンビということ本人は認めたくない。

「あの、今日お訪ねしたのはですね……朱里くんに聞きたいことがあ

るってというか、相談があつてですね」

「あはは。乱丸、彼女はお前本人じゃなくて、乱丸が知っている情報に用があるんだってさ」

「そういうことな。全くいつもご鼻屑につてか？」

予想通り、話が進んでいかない二人を見て小太郎が苦笑しながら助け船を出す。そこで乱丸は事情を察してあつという間にクールダウンすると本来の陽気で賑やかな物腰になった。

「それじゃあ、プライバシー保護のために僕は部室の外で待つてるよ」

「え!? あ、あの……黄瀬くんにもできたら同伴してもらえると」

「ごめんね、ルールみたいなものだから。大丈夫、乱丸はちよつとだけ馬鹿だけど、恋愛沙汰には大真面目で誠実だから安心してよ」

乱丸と二人つきりになるという状況に色んな意味で困惑する女子生徒を安心させるように念押しと小太郎は絵になる仕草で手を振り退室してしまった。

「さて、昼休みもあと少しだ。有意義に使おうぜ。で、何が聞きたい？」

「……私と同じクラスの男の子で田原くんはもう彼女さんとかいるのかなって」

「田原……陸上部のあいつな。良い趣味してんじゃん！ お目が高いよー！」

「でっ……ですよね！ 棒高跳びを頑張っている姿がとてもカッコ良くて……気付いたら、胸の奥がぽかぽかしていて」

「良いね！ キミも今最高にキラキラしてんぜ！ 安心しなよ、俺の知る限りあいつはまだ誰とも付き合つてない、でもライバルは多いかもしれないから油断はするな」

「ほ、本当ですか……あうう、それじゃあ私なんて相手にされないかも」

意を決して相談事を話し始めた女子生徒の言葉に乱丸は真剣に耳を傾ける。

恋愛が大好きなことが功を奏してか、一年生でありながら学校内のあらゆる恋愛事情を独自の情報網で把握していると噂される乱丸に

はこんな風に恋する少年少女たちがよくアドバイスを求めてやってきていた。

「土俵に上がる前から諦める奴があるか。自信持って！　まずは行動だ。キミ、動物は好きな方？」

「え……はい。おうちでも猫を飼ってますけど」

「田原は意外と動物大好きなんだ。N―^{ネイバー}フォンの待ち受け画像も有名なドラマの三毛猫の写真だ。そこから切っ掛けに話し振ってみなよ。さり気なく、私も家で猫ちゃん飼ってますって話を繋げていけるはずだ」

「私なんかにできるかな……ううん、やってみます！」

さながら恋愛ゲームに出てくる主人公をサポートする同性の友人キャラのように的確で細かな情報とアドバイスを送る乱丸の言葉に淡く秘めた恋とは裏腹に自信なさ気だった女子生徒の気持ちはすっかり奮い立っていた。

「いい顔になってきたぞ、がんばって！」

「はい！」

「困ったらいつでも相談乗るから。ほらこれ、俺のメアド渡しておく」
「最初は怖くて不安だったけど、なんだかやる気が出てきました！」

「いいか、大事なのは一歩踏み出す気合だ。恋は人を強くする、愛は人を大きくするだ。応援してるからな！」

「今日はありがとうございました朱里くん。私やってみます！」

こうして、訪ねて来た時は背中を丸めておどおどしていた女子生徒は部室を去る頃には背筋をしゃんと伸ばして恋に燃える乙女の顔になっっていた。

有する情報とアドバイスの質も確かだが何よりも自他に関係なく恋愛にどこまでも本気な乱丸の姿が彼女をそうさせたと言っても過言ではないだろう。

「いい仕事したあ俺」

「お疲れ。本当に恋愛アドバイザーとしては一流なんだよね」

「今日の自己紹介は自信あったんだけどなあ。しまった……：将来のために貯金もしてるっていうのも言っておくべきだったか」

「アピール部分が全体的に生き急ぎてるのが問題なんだと思うよ」

今日もまた一人、恋に悩める若人を手助けした達成感に乱丸が満足げにグツと拳を握っていると小太郎は労い半分苦笑する。

「あと、彼女には聞こえてないと思うけど……いくら一人でいるからって、さつきみたくないかがわしいことは声に出さない方が良いでしょう」

「というと？」

「え……いや、だから、揉むとか言ってたじゃん」

咳払いを一つして、親友のやや軽薄な生活態度を窺めるつもりだった小太郎だったが不意打ちの質問の前に反射的にピンクな想像をしてしまい、真っ赤な顔でしどろもどろになってしまった。

「小太郎、お前はどこを揉むところを想像したんだ？ 俺はお付き合いできたのなら、その人の二の腕を揉みたいと思っただけだぞ？」

「なっ!? ず、ずるいぞ乱丸!」

「キヒヒ！ 安心したよ小太郎。お前も男子だ！ ちゃんと健全な欲求を秘めた普通の男の子だ！」

昔から自然体で品行方正ないい子である親友がちゃんと歳相応な好奇心を持っていたことに乱丸は必要以上に迫真の演技をしながら、砕けた様子でからかった。

親戚であり、ちよつとした秘密を共有している独特の間柄だからできる微笑ましい距離感だ。

「うるさいなーもう！ 恋愛漫画愛読者から、え……えっちな漫画中毒者に鞍替えしたのかよ、この恋愛ゾンビー！」

「いまの漫画は少年誌でも相当に過激な描写あるんだぞ」

「え——うそ!」

「マジだよ。前も後ろも丸見えだぞ」

「う、後ろも!」 待って……その、つまりスカートの向こう側までつてこつて。」

「真実はお前の眼で確かめることだ。とういか、お前の場合はそのうち愛しのも——」

男友達同士の滑稽だが熱く尊いやり取りをしていると先程の女子生徒と入れ替わりに別の生徒が「やつほー！」と弾んだ声で部屋にやってきた。その声を耳にして、乱丸はあからさまに邪魔が入ったと残念がり、小太郎は青ざめた顔で必死に深呼吸を繰り返して平静を取り戻そうとする。

「コタクん、乱丸くん、みーつけた！」

春のお日様を思わせる笑顔が眩しく、亜麻色の髪をウェーブ巻きにしているのが目印のスタイルも良い、ゆるふわな感じの女子生徒だ。彼女の名は月島桃奈^{つきしまもな}。天文サークルの最後の一人にして紅一点だ。

「よお。お前が昼休みにここにくるのは珍しいな」

「やあ桃奈。なにか、僕たちに用事かい？」

中学生の頃からの友人同士の三人なので普通ならば胸を高鳴らせるであろう桃奈の可憐さにも自然体で接する二人。そんな乱丸たちに桃奈は「パンパカパーン！」とおどけた様子で自分のNーフォンを取り出して、先程送信されてきたメールの文面を再確認して口を開いた。

「^新バイトの^しソフト^任変更^務の連絡がきたからそのお知らせにね」

にこやかな桃奈の言葉に隠された意味に小太郎と乱丸の目つきが変わった。

海良高校天文サークル。この三人だけの同好会には誰にも知られてはいけない真実の顔がある。

「桃奈、^{支部長}店長からのメールの内容を教えてください？ おおまかでもいいよ、詳しくは放課後にじっくりと相談しよう」

「昨日の夜からの行方不明者の女性が一人。それと女性の自宅と仕事先までの道中にある廃墟で不審火があった痕跡が見つかったらしいよ」

「——連中の仕業だな」

迷いなく答えたのは乱丸だ。

小太郎と桃奈もまた彼の言葉に異を唱えることもなく真剣な面持ちで頷いた。

「そうだね。この町であいつらの好き放題にはさせない。乱丸、桃奈

……張り切っていくよ」

気合を入れて二人を鼓舞しながら、小太郎は懐に忍ばせていた動物を模した仮面をチラつかせた。三人が裏の顔でやる気に満ちた顔をしたタイミングでちようど昼休みが終わる予鈴が鳴り響いた。彼らはなんだか締まらないね、と言いたげな屈託のない笑みを浮かべるとそろそろと午後の授業へ遅れないようにと歩き出した。

「あ、そうだあ乱丸くーん」

「どした？」

「コタくんにあんまり変なこと吹き込んだら、お仕置きタイムが待ってるから気をつけてね？」

「……はい。ごめんなさい」

背後から、突然囁かれた可愛らしい声色の宣告に乱丸は震えあがった。

ふと横目を覗くとそこにはニコニコと桃奈が朗らかで黒い満面の笑みでこつちをジツと見つめている。圧が強い。とても、圧が強い。

「うんうん♪ えらい子だね、乱丸くんは……約束したから、ね？」

「心得ましたあ」

「ならいいよ、今夜もがんばろうね！ ねえ、コタくーん！ お昼ごはん食べてる時に可愛いワンコの動画教えてもらったんだー♪ あと一緒に見ようよお♪」

先程の乱丸と小太郎の男の雑談をバツチリ聞いていた桃奈は乱丸にシメしを付けると華のような笑顔で愛しの彼氏の右腕に自分の腕を絡ませて体をくつつける。

「わっ!? ハハハ、いいけどその犬は桃奈より可愛くはないでしょ？

僕は動画みてる君のことを眺めてるかもしれないよ？」

「やーもー褒めても何も出ないよお！」

目の前で恥ずかしげもなく、のろけまくる親友でありお似合いの恋人同士である二人を乱丸は死んだ魚のような虚無の眼差しでしばらく見守っていた。

※ ※ ※ ※ ※

地方都市である海良の特徴の一つに『都会過ぎず、田舎過ぎず』というフレーズがある。

中心部である繁華街は首都に負けず劣らずに煌びやかで夜が更けても多くの人々が行き交う盛り場だ。同時に地下鉄で数駅、もしくはほんの数十分ほど歩いた先の区画でも人口密集が少なく、落ち着いた喧騒を気にせずのんびりと生活するのに適したエリアもざらにあるというアンバランスさを有している。

だが、そんな閑散とした場所の夜は時として常識から外れた闇深く、良くないモノを呼び寄せてしまう恐れを孕んでいる。

「ヒイ……ハア……何なのよアレ!？」

人気のない夜道を仕事帰りの若いOLらしき女性が涙目になって何かから逃げていた。

助けを呼ぼうにも周囲に建て物は少なく、あつたとしても軒並み灯りが消えている。

「お願い……酔っ払いでもホームレスでも誰でもいいから誰かいてよ……きやあツ!？」

髪や化生が乱れてしまうことも厭わずに懸命に逃げていた女性の足元に突然バレーボールサイズの火の玉が降り注いで行く手を阻んだ。

「安心してくれよ。丸焦げになんて無粋な真似はしないからさ」

「きやあああ!?! あ、熱いつ!?!」

仄暗い闇夜の奥から不気味な声が聞こえたかと思うと女性に直撃するのをあえてズラして再び火の玉が飛んできては周囲に弾けた。

焼身こそしないものの、襲い来る熱と恐怖で泣き喚く女性を愉快そうに眺めつつ、その異形はついに彼女の目の前に姿を現す。

「なんなのよ……お化け? 怪獣? いや! いやいやいやあああつ!」

「シユルルッ! いいねえ今夜も美味しそうな獲物が引つ掛かったよ!」

目の前の光景が受け入れられずに頭を抱えて錯乱する女性を見つ

めて異形は哄笑する。そこにはぬめりを帯びた黒い表皮にけばけしい黄色い模様が入った人型の蜥蜴のような怪物が立っていたのだ。両腕は長く細いが爪は刃物のように鋭く、両脚と尾は長く筋肉がみっちり詰まっているのか太く力強い。

「どうか安心して欲しい、お嬢さん。君の色は私がじっくりと堪能して食べてあげるとも」

「わ、私……死ぬの？ あなたに食べられて死んじゃうの……？」

「そうだねえ。君も牛馬や魚を食べて生きているのなら分かると思うが、食べられれば死ぬだろうからね……諦めてくれたまえ」

蜥蜴の怪物の大きな口が開くと大量の涎が気味悪く糸を引く。

ぐちそうを目の前にして恍惚とした表情を浮かべた怪物の口からは溜息の代わりに火炎が漏れた。

「昨夜の女はウエルダンに仕上げたが今夜はミダイヤモンドが良さそうかな？」

火蜥蜴の爬虫類染みた鋭い眼は嗜虐的に絶望の表情を浮かべる女性を見下していた。

この怪物の正体は戯我^{ギガ}。

さしずめ、炎を操る捕食者サラマンダー・ギガと言ったところか。

遙か昔から古今東西に存在して、人間の色彩を食らう事で生きる恐るべき異類異形である。

「こないで！ だ、誰か……誰か助けてっ!!」

「シユルフフフ！ 人間風情がいくら増えたところで無駄なことだよ」

怪物の形をして近付いてくる死に、震えた手でバックを振り回して抵抗する女性をサラマンダーは哀れみと侮蔑を込めて盛大に笑った。

だが、この戯我は失念していた。

人知を超える力を持って傍若無人の限りを尽くす彼らにも天敵がいるということ。

《レリックライザー!》

「むう……!?!」

月下に突如として不思議な音声の流れ、闇に紛れて何者かが建物の屋根や電柱を猿のように飛び交って迫ってきたのだ。

サラマンダーが目を凝らすとフード付きのマントを羽織って、顔の上半分を隠す赤い猿の仮面を装着した少年が銃身の右側面に何かを二つ装填するような窪みスロットがある奇妙な形状の黒い銃を手にして自分に目掛けて跳躍しているのが映った。

「キャオラアア!!」

「ぐっ……なんだお前は!？」

飛来した少年は慣れた手つきでレリックライザーの銃口をサラマンダーに向けた。明らかな敵対行為にサラマンダーは慌てることなく数発の火球を吐いて目触りな人間を羽虫を潰すように始末しただった。

けれど、銃撃のモーションは少年の偽装だ。フェイク

宙空でありながら、軽業師のような身のこなしで火の玉を全弾回避した少年は小気味の良い飛び蹴りで戯我を怯ませた。

「俺が誰かって? そんなもん決まってるだろ!」

着地した弾みでフードが外れて少年の太陽のように真っ赤な赤髪が揺れる。

ノースリーブに改造した黒い詰襟の軍服を纏った彼は物怖じすることなく左腰から弾丸カートリッジのようなものを二つ取り出す。透明な薬莢の内側に液体インクが詰まっており、色はそれぞれ、クリムゾンレッドとスモーキーホワイトだ。

《ヒート!》

《ハヌマーン!》

「愛の戦士さ」

人類が戯我と戦うために生み出した力であるモンスターキッドを起動させた少年はそのままレリックライザーのスロットにセットするとフォアエンドを握る。そして銃身を前後にスライドさせて手を放すと、再び銃が音を発した。

《Loading Color!》ローディングカラー

準備完了の合図である音声を聞き届けると仮面の少年は口角を闘

志で吊り上げながら銃口をサラマンダーに向けてトリガーを引いた。

「急々如律令！ 荒ぶれ！ ヒートハヌマーンツ!!」

《Callling!》

銃口から四肢に火炎を宿した白猿が姿を現し、悪辣な火蜥蜴に向かって俊敏に攻めかかった。

『キキイイーッ!』

「ぬがあ!?! この力は……抜かった! ここは貴様らのテリトリーだったのか!?!」

牙を剥き出しにして、激しく襲い掛かってくる白猿の高熱を帯びた爪に応戦しながらサラマンダーは自らが犯した過ちに舌打ちする。

「あ、あなたは……一体? はうっ?」

「おねーさん、本当にすみません。俺ら秘密的組織でして……ご勘弁を」

突然現れて自分を助けてくれた仮面の少年を動揺しながら見つめていると、女性はあろうことかその少年からイイところに不意打ちを食らって気を失ってしまった。

猿面の少年は気まずそうに平謝りをしつつ、銃口と戦意は一切緩めずにサラマンダーに向けたまま対峙すると相棒に合図を出す。

「小太郎! おねーさんは頼んだぞ!!」

「任せて乱丸! こちら黄瀬、被害者を保護しました」

急転する状況にサラマンダーが警戒して手を出せずにいると今度は音もなく正規の軍服とマントを羽織り、梟の仮面をつけたもう一人の少年が被害者の女性を担ぐと脱兎の如くその場から離脱していく。『了解です。コタくん、このまま安全なコースをナビするから後続の人たちと合流して。乱丸くん、確認したけどいまの時間帯は周辺どのビルも無人だから思いっきり暴れちゃっていいからね! 二人とも注意一秒怪我一生を忘れずに……ふぁいとおー!!』

「合点だあ!!」

海良市某所に存在する封魔結社LOT海良支部に設けられたオペレータールームにて二人の後方支援を担当する桃奈からの声援をインカム越しに受けた二人は気合の叫びを上げて彼女に答えた。

乱丸、小太郎、そして桃奈——三人は世界の均衡を保つため日夜人知れず活動する封魔結社LOTの封魔司書の一人だった。

そして、乱丸こそが海良支部が誇る駆け出しの粗削りなエース。無事の人々の色彩を食み、平和を踏み躪る戯我に対する最大の切り札を担う者の一人なのだ。

「私の今夜のお楽しみをよくも台無しにしてくれたな封魔司書！」

「悪いな、お前らにとことん嫌がらせするのが仕事なんぞでな！」

苛立ちを隠すことなく殺意を浴びせてくるサラマンダーに乱丸は臆することなく言い返すと猿の仮面を外して鬪志に満ちた輝く双眸で打倒すべき邪悪を直接睨んだ。

《レリックドライバー！》

そして腰部に巻いた何かをはめ込むような奇妙な形状のバックルがついたベルトに一度モンストリキッドを引き抜いたレリックライザーを組み合わせる。

《ヒート！》

《ハヌマーン！》

「冥土の土産だ。お前を絶景に塗り直してやるぜ！」

乱丸は指で額縁を模して戯我をフレームに収めるとにんまりと啖呵を切った。

素早く再びスイッチを押した二色のモンストリキッドをレリックドライバーとなった銃のスロットに装填。そしてグリップと反対側にあるバックル部のハンドルを握って引っ張ると、そのベルトから先程とは少々異なる音声の流れ出す。

《Loading Color! GRADATION!》

銃身のエネルギーラインが真紅と白の光を放ち、インクカートリッジも同じく左右で交互に発光する。乱丸はグリップを手にしたまま、引き金を指で弾く。

「変身!!」

《BRUSH-UP!》

その刹那、乱丸の頭上から真紅の五芒星が、足元には白い五芒星が描かれ、二つの光が重なり合おうとするかのように上下へ動き始め

る。

さらに、彼の身体にも変化が起きた。

白い星が通り抜けると同時に全身が白いインクのような液体で包み込まれ、細胞組織のようになったそれが乱丸の身体と合身して『上塗り』し、身体を変質させつつ外骨格を描き出す。

続いて真紅の星を潜ると、生体装甲が火炎を帯びて肩や腕、脚部などが真紅に染まっていき、両眼が緑色に強く発光する。

五芒星が霧散するとそこには白い仮面に孫悟空の緊箍児のような金色の冠を持った戦士がいた。まるで格闘家グラップラーを彷彿とさせる白い軽装の装甲を纏った白猿のようだった。四肢を守る籠手と右胸を覆う胸当ては燃え盛る火炎を象った紅鉄で腰からは尾のようなサブアームが伸びている。

《悪鬼を砕く灼熱の魔拳！ ヒートハヌマーン！》

『キキイイイイイ——ッ！』

烈火と雄叫びがベルトから鳴り響き、菱形をした翡翠色の複眼を煌めかせ、仮面の武芸者は鍛え上げた拳を握りしめる。

「仮面ライダーシラヌイ！ 一発お突き合いしてくれよ？」

シラヌイと名乗った乱丸は腰を落として両腕をゆらりと振り上げる独自の構えを取ってサラマンダーを迎え撃つ。それはまるで縄張りを荒らす外敵を威嚇するまじら獐猛な猿のような構えだ。

「霊装使いか……面白い。男の色は食べない主義だがお前は気晴らしに鬪り殺しにするとしよう!!」

「できるもんならやってみな！」

紳士的な物腰からは意外なほどに好戦的な一面を見せたサラマンダーは唸り声を上げて飛び掛かってきた。そんな戯我を調伏すべくシラヌイもまた果敢に迎え撃つ。

「ウオオツキヤアアア!!」

猿叫と呼ばれるような人間の発する声とは思えない裂帛の気合に満ちた雄叫びを上げながらシラヌイはサラマンダーの鋭い細腕をかわして、カウンターの膝蹴りを打ち込む。

「げっほっ!? こ、この……!!」

「キキエアアア!!」

重い一撃に怯んだ隙を逃さずに鞭のようにしならせた癖のある拳打を左右から激しく浴びせていく。スナップを効かせたことで威力を増したシラヌイの拳が直撃するたびにサラマンダーの意識と視界はぐにやりと揺れていく。

「いい気になるなよ! シュルラアアア!!」

「ウラアアアオオオ! 生憎だが俺は浮かれてる方が調子良いんだよ!」

ふらつきながらも憎悪に満ちた表情で火の玉を連続で吐き出すサラマンダーだがシラヌイは野獣のような獰猛な戦い方と軽快な舞踊を思わせる歩法を組み合わせた独自の体捌きでそれらを全て弾くか避けてしまう。

「だったら……!」

「逃がすかよ!!」

このままでは不利とみたサラマンダーは強靱な下半身の能力を生かして素早く逃亡を開始した。

それを許しはしないと追撃するシラヌイとで二人は闇夜の中を激しい攻防を繰り返しながら深夜の立体駐車場に戦場を移した。

「トカゲ野郎……どこに隠れた?」

「ここだよ、野蠻なバカ猿めが!」

非常灯の頼りのない光だけが灯る閉鎖的な立体駐車場の中を一階、二階と戯我を追いかけていたシラヌイを音もなく壁伝いに這って移動していたサラマンダーが急襲する。長く強靱な尻尾を振り回して何度もシラヌイを叩きつける。

「このまま骨だけを粉々に砕いて野犬どもの餌にでもしてあげよう!」

「グウ……! 犬猿の仲って言葉を知らないのかあ? それこそ犬も食わないってやつだぜ!」

丸太で殴りつけられたような尻尾の攻撃を食らって出入り口の坂を装甲から火花を散らして転がるシラヌイだがすぐに立て直すと目

を凝らして敵の動きを観察する。まるで単体で意識があるかのように不規則な動きで襲ってくる尻尾の軌道と僅かに確認できる癖を見切るとリズムよくステップを刻んで踏み込んだ。

「恰好の的だ！ 焼け死んでしまえ!!」

「なんの！ ウオオツキヤアア!!」

横薙ぎに迫る尻尾を紙一重で手をつき跳ねたことで回避に成功したシラヌイ。けれど、空中で無防備になった隙を狙い澄ましてサラマNDERは特大の火球を吐き出した。

悪辣な偏食家の蜥蜴は勝利を疑わなかったがシラヌイが一步先を読み制す。天井裏に張り巡らされたスプリンクラー用の水道管を掴んでぐるりと方向転換に成功すると火の玉を華麗に捌いて反撃の跳び膝蹴りを叩き込む。

「キキヤアアアア！ キヤオツ！ キヤオツ！ キヤオオオツ!!」

「うぎゃあああ!?! こ、こいつ……本当に人の子か!? なんだこの獯猛さは?」

手痛い一撃を受けて悶絶していたサラマNDERに飛びついて、激しい取っ組み合いを繰り広げた後に首根っこを掴んだシラヌイは興奮した山猿のように駆け出すと一端外に飛び出してから、片手で捕らえた相手を何度も立体駐車場の壁に叩きつけながら上へ上へとよじ登っていく。

本当の白猿の魂が憑依したかのように人間離れた奇声と攻撃性を惜しげもなく晒して自分を攻撃するシラヌイに恐れを感じたサラマNDERの戦意は確実に削がれていった。

「が、は……こんなヤツに負けるなど……ッ！ ムツ!?!」

「良いところを教えてやるよ。人は恋で強くなって、愛で大きくなる。俺はそのどっちも大好きだ……だから、ガンガン強く大きく成長中なんだよ」

最上階——屋上にまで連行されたサラマNDERは乱雑に投げ捨てられて身に降りかかった不幸に怨嗟の念を漏らした。だが、屋上の片隅に偶然見つけたある物を発見すると舞い込んできた好機に歪に口

元を緩ませる。

「シユハハ……ゲツハツハツハハハ！ 素晴らし言い草だなあ封魔司書！ ならば、その博愛に殉じて死ぬがいい!!」

「なにやって……んおツ!」

サラマンダーは急に狂ったように高笑いを上げると大きく息を吸って特大の火の玉をどういうわけかシラヌイとは反対方向の壁に向かって吐き出した。

うつ伏せで倒れたままの怪人に一分も隙も見せずに接近していたシラヌイは突然の珍行動に首を傾げるが火の玉を追った視線の先で見つけた存在に血相を変えて駆け出した。

「ぐー……がー……いー……ういー……ひつく……ふごー」

「オイオイオイ！ 桃奈あ！ 駐車場の屋上になんかサラリーマンのオツサンが寝てるんだけど!」

『ええっ!? ウソでしょ、ちよちよちよつと待ってね……やだあ、私がチェックした後に酔っ払いのおじさんがそこに迷い込んでたみたい!』

「うつへえええ……マジかい!」

仮面に内蔵された通信装置から慌てふためいた桃奈の声がシラヌイの鼓膜を震わせる。

なんと、無人と思われた立体駐車場に予期せぬ一般人の珍客が迷い込んでいたのだ。

幸い高いびきをかいて眠っているのでシラヌイの姿を見られる恐れはなさそうだが今まさにその酔客をサラマンダーの火球が焼き殺そうとしていたのだ。

「ハッ！ ふおおおお……間に合ったあ」

「バカな奴め！ 安心するのはまだ早いだろうに！ 死ねええ!!」

幸いにも間一髪でシラヌイの手刀が火球を潰して、思わぬ犠牲者を出さずに済んだ。

だが、一息ついたのも束の間夥しい勢いの大火炎がシラヌイを包んだ。

「ぬう……うああああ!」

『乱丸くん!?!』

「火の玉しか吐けないと思っていたのかい？ 大間違いだとも間拔けめ!!」

サラマンダーの哄笑と共に奥の手である強烈な火炎放射がシラヌイを襲った。凄まじい高熱と炎が容赦なくシラヌイを焼き消そうと勢いが増すがこれを避けてしまえば代わりに後ろで居眠りを続ける男が犠牲となってしまうだろう。シラヌイは苦悶しながらもその身を盾にして耐えるほか手段がなかった。

「愚かな奴だ。身を転がせば私の火炎など容易に避けることができるのに、後ろの汚物がそんなに大事かね？ それが愛の戦士の矜持という奴かな？」

「グウウウ……！ お前みたいなのに気安く愛を語って欲しくないぜ」

気を緩めればシラヌイという神秘の鎧ごと黒炭に焼き尽くされてしまいそうな火炎の中で耐えながら乱丸は侮蔑と嘲笑の言葉をこぞとばかりに吐き並べて勝ち誇るサラマンダーに強がってみせる。

「あと、俺のことを馬鹿にするのは許すが……愛を馬鹿にしたお前はぜってーぶっ飛ばすから覚えておけよ」

『がんばって、乱丸くん！ あとちよつとで——』

「やせ我慢だな見苦しい。いいさ、ここまで弱らせれば殺さずともお前の色彩は簡単に食めるとも!!」

片膝を突きながらも必死の思いで踏ん張るシラヌイに苛立ちを覚えたサラマンダーは火炎を吐くのを止めることなく、直接彼の色彩を貪ろうと近付き始めた。

だが、そんな時だった。

「乱丸！ …これを!!」

「待ってたぜ、小太郎！ …これで百人力だ!!」

被害者女性を安全な場所に連れ出した小太郎が全速力で駆けつけてシラヌイに向かってある物を投げ渡した。

《アーティフィシャル
A ウエポンX!》

小太郎がシラヌイに届けた物は長さ100cmほどの飾り気のな

い真紅のロッド型武具。それは本来ならまだ調整中だったシラヌイの専用武器であった。

頼れる仲間から託された力を握り締めたシラヌイは巧みな棍捌きでAウエポンXを風車のように高速回転させて火炎放射を吹き消していく。

「ウキヤアアア！」

「いぎや!? クソめ、そんな棒切れ一本手にしたからと勝った気でいるんじゃない！」

地獄の業火を薙ぎ払い、棍の間合いに敵を捉えたシラヌイは縦横自在にAウエポンXを操ってサラマンダーを打ち据える。

だが戯我の意地を見せて踏み止まったサラマンダーが尻尾を唸らせ振り下ろすと攻撃を受け止めたロッドは真ん中から綺麗に折れてしまった。

「おお、やったぞ！ こけおどしにも程があるじゃないか、ガラクタめ！」

「とんだお馬鹿様だぜ！ コイツの本領を見せてやるよ！」

《メタル！ チャージ Charging カラー Color!》

「な、なんだ!？」

武器を破壊されたと言うのに余裕の態度のシラヌイは新たにメタルシルバーカラーのモンスターキッドを取り出すとAウエポンXに設けられたスロットにセットする。

《AウエポンX — トライエッジ T!》

音声が響くと折れたのではなく二本に分割されていたAウエポンXの側面にあるスロットからまるでインクが溢れるように液体金属が噴出して刃を形成していく。

一対の短いロッドはあつという間に釵に似た三叉剣へと形を変化していたのだ。

使用者の創意工夫とメタルのモンスターキッドの応用で無限に姿を変える変幻自在の武具——それがAウエポンXの真骨頂だ。

「コイツの恐ろしさを腹いっぱい味わいな！」

シラヌイは三叉剣となったAウエポンXを逆手で握ると踊り跳ね

るような歩法でサラマンダーに切り込んだ。ヒュンヒュン——と乾いた風切り音を鳴らして、月光を受けて煌めく刃が不気味に黒光るサラマンダーの異形を目にも止らぬ早業で乱れ切りにしていった。

「ぎゃあああああ!? この……いい加減にしろ!!」

「キエヤアアア!!」

全身に刀傷を受けながら、火球を吐き出しつつ苦し紛れに爪を突き立てて反撃するサラマンダー。休みのない波状攻撃は恐るべきものだがシラヌイは右手に持った三叉剣の刃で爪を絡め取ると左手に持った得物で尻尾を輪切りにする。

《AウエポンX—N!》
ヌンチャク

尻尾の切断面から血飛沫のようにインクを撒き散らして苦しむサラマンダーにシラヌイは畳み掛ける。真紅の短棍を纏う刃が砕けたかと思えば瞬く間に溢れ出た新たな液体金属が鎖となって二本を繋ぐ。

「ウオオオルツキヤアア! こんなこともできるぜ!!」

「ぶっぼっばあああ!」

大型のヌンチャクに変化したAウエポンXを洗礼された動きで振り回すと怒涛の勢いでサラマンダーの顔面を滅多打ちにする。

「がああ……っ!? 是非もない、一人では死なんぞ……道連れだ!」

「うおっ!」

満身創痕に追い詰められたサラマンダーは勝利を諦めた代わりにシラヌイの命だけは奪って見せると執念を燃やすと僅かな隙をついて鮮血のように赤い舌を伸ばしてその首に巻き付けた。

「このまま共に焼け死のうじゃないか! ああ、全く……美女で無いのが残念だ!!」

「同感だ。好みの女の人なら心中もやぶさかじゃないけど、お前とは遠慮するぜ」

慌てず騒がず、舌が首を巻く寸前に右手を滑り込ませて一方的に絞殺されるのを防いだシラヌイは速やかに対策を講じる。

《ヒート!》

「急々如律令」

《Callling!》

「キヤオラア!」

左手の指先で器用にトリガーを弾くとシラヌイの両籠手に隠された二本の鉤爪がせり出す。鉤爪は一瞬で赤光を放って超高熱を帯びるとサラマンダーの舌を溶断してみせた。

「キエヤアアアオオツ!」

「ぐぎゃ——仮面の封魔司書……ここまで強いとは!？」

舌が切られた反動で頭から転びそうになり滑稽にジタバタとサラマンダーが仰け反っている隙について、シラヌイは駆け出すとプロペラの回転を思わせる強烈な開脚蹴りをお見舞いした。

シラヌイと諸共に焼け果てようと目論んだサラマンダーだったが傷ついた体はインクが零れ抜けて、色ぼけたように黒ずんで弱っていることが見て取れた。

確実な勝機を見出したシラヌイは決着をつけるべく打って出る。

《Reordering Color!》

「こつからが大一番! 総仕上げといくぜ!」

レリックドライバーのグリップをしっかりと握ると軽快にトリガーを弾いた。

《Last Callling!》

「キエエエヤアアア!」

ドライバーから手を放したシラヌイの双眼が爛々と輝き、頭部の金冠が展開。両肩や脚部の装甲も展開し、放熱ダクトのような生体器官が露出される。

熱と共に真紅と白の光を噴出し、荒ぶる白猿の戦士は猛然と駆け出した。

《ヒートハヌマーン・クロマティックストライク!》

「ウオオツキヤアアアアアアアア——ツ!!」

邪悪を砕く鉄拳が大気を焦がすように真つ赤に燃えて輝く。

鬼気迫るほどの猿叫を轟かせて肉薄したシラヌイは万物を融解する超熱波の如き拳打の乱れ撃ちをサラマンダーに叩き込む。

「アア……ギヤアアアアアアアアアア!？」

トドメの正拳突きを打ち込んだ瞬間にサラマンダーの身体は急激に色を失っていくとあり得ないといった様子の断末魔を上げて爆散して果てた。

激しい爆炎と突風が徐々に収まっていくとその中心に佇んでいたシラヌイの展開されていた装甲が元に戻る。

「どうだい！ 絶景かな……ってね」

獰猛に滾る闘志を鎮火させるようにゆっくりと息を吐いて残心をしてたシラヌイはおもむろにサラマンダーが消し飛んだ場所を両手の指で粹取りしたフレームに収めると戯我を調伏して取り戻した平和な世界を実感して得意げに頷いた。

「乱丸、お疲れ。さっきのおじさんは人通りの多いところに運んでおいたよ。たぶん、巡回するお巡りさんあたりが見つけてくれると思う」

「ありがとな。調伏完了……だと思っけど、桃奈？」

『うん、こっちのほうでも異常は見当たらないよ。さっきはホントにごめんね、乱丸くん』

桃奈の通信を聞くとシラヌイはようやく安心してレリックドライブをバツクルから外して変身を解いた。

元の姿に戻った乱丸は火炎の高熱に苦しめられながら戦ったせいか汗だくになっていた。栗毛の色に戻った髪もぐしよりと汗に濡れている。

「気にすんなって。あの後、急いで小太郎に応援要請して、ウエポンXのフライングの使用許可まで取ってくれたんだろ？ 十分すぎるほどナイスフォローだよ」

『むうーん……そう言ってくれると助かるよお。戻ったらお詫びにジュースか何かご馳走するね』

「ラッキー！ ならラビットたんジュースで頼むわ」

「乱丸いつもアレ飲んでるよね？ そんなに美味しいの？」

「……思い出の味なんだよ。さあ、帰ろうぜ！」

頼れる同僚であり、親愛なる友人たちと屈託のない会話を弾ませながら乱丸はマントと仮面をかけ直すと現場を後にした。海良の街に

また静かで穏やかな夜が戻ってくる。

そして、愛を謳う白猿の戦士は人々を未来と平穏を守るため明日も摩天楼を飛び回るのだ。

※ ※ ※ ※ ※

とある日の早朝に海良の外れにある高台の墓地に乱丸はいた。

潮風を浴びながら洋型墓地が寂しげに並ぶ道を歩いていくと、ある墓石の前で歩みを止めた。その墓はよく掃除がされているおかげが周りの墓石と比べて段違いで綺麗だった。

「おはよう、ユキちゃん……今日はいい天気になりそうだよ」

普段の賑やかさは鳴りを潜めて、優しい声で語りかけると乱丸はせつせと持参した道具でここに眠る人の墓石を丁寧に掃除していく。「高校生になったけど、顔合わせる面子は中学の頃の連中とほとんど変わらないからあんまり実感わかないよ。でも、制服は結構気に入ってるぜ？ 学ランからブレザーに変わったんだ。ネクタイ結ぶのは大変だけだよ」

掃除を済ませてピカピカになった墓石の目の前にゆっくりと腰を下ろした乱丸は楽し気に最近の日々の出来事を話し始めた。子守唄を聞かせるようなあたたかな声と遠い日を懐かしみ、また悔やんでいのような寂しい瞳で。

「そういえばさ、ユキちゃんも好きだった移動販売のホットドッグのお店復活したんだ。チリソースが塗ってるやつ。おじさんは引退したけど熱心なファンが作り方を習って再開させたんだって。やつぱり美味しかったよ……今度買えたら持つてくるね」

恋と愛が大好きだと道化のように謳う少年の愛はもうずっとここにあった。

時間と一緒に凍ったように長くここに縛ってあった。

墓守のように自らの手で杭打って、本当に綺麗だと思った色彩ひとの思い出と一緒に捨てることなく、拾うことなく置いていた。

同時にここに眠っている人との約束を果たすためにずっと藻掻い

ている。足掻いている。

かつての残夢^恋が覚めるほどの出会いを探していた。

「ユキちゃん……またくるね。俺、がんばってくるよ」

太陽が空高くへと昇り始めた頃に話したいことをひとしきり話し
終えた乱丸は惜しむように、けれど力強く立ち上がり踝を返した。

決して色褪せない愛を胸に秘め、邪なる化生どもを調伏せしめる封
魔の狩人の仮面を被り少年は今日も生きていく。

第二頁「麗しの放浪者（ストレンジジャー）は愛を訝しむ」

あれは忘れもしない、八年前の春だった。

当時の俺を簡単に説明するなら、お山の猿つてところか。

絵空事のような話だけど、俺は大昔から世界のあちこちに巣食っている戯我とかいう怪物たちと最前線で戦う務めを背負った家系に生まれた。

優秀な兄がいてくれたお陰で背負う宿命のようなものはそれほど無くて、ただそれでも出廻らしの弟と呼ばれながら幼い頃から自分の身は自分で守れるぐらいに稽古を積まされて腕っ節があつた俺は絵に描いたようなガキ大将で血気盛んな山猿だった。

年上だからって偉そうに自分よりも力の弱いチビすけたちをイジめて得意げになっている連中に真っ向から喧嘩を売って、公園の砂場に沈めるのが日課な愉快な毎日を送っていたんだ。

それから、偶然見た恋愛小説が原作のテレビアニメにドハマリした結果、恋愛をテーマにした何もかもが大好きになった。恋と愛がついたものには何でも飛びついたような思い出がある。

とはいえ、先に話したように実家では歳の離れた優秀な兄がいるもんだからヒエラルキーは最下層だ。薄情つてわけじゃないけど両親はそれぞれL O Tでの職務をこなしつつ、兄を朱里家歴代最高峰の封魔司書に鍛え上げるために付きつきりだった。

『お前は兄の駒として生きろ』

爺さんが生前に良く俺に言つて聞かせていた言葉だ。

気に障る物を感じなかったわけじゃないけど、真っ向から拒絶する気も起きなかった。

そう思えたのも俺の方は放任主義と言うべきか、赤ん坊の頃から殆ど祖父母に育てられて特に期待されない反面、一世一代の大業物の刀を鍛えるように仕立てられた兄の暮らしに比べればそれなりに自由

気ままに生きることができたからだと思う。

おかげで稽古の一環として、世を忍ぶ仮の姿である家業の手伝いも随分とやらされた。

あの日もそうだった。

もうすぐ小学二年生になるような子供には重荷に見える醤油や酒が詰められたプラスチック箱をお得意先の料理屋に宅配した帰りによく遊ぶ公園に寄った時のことだ。

「ぐす……けほっ……こほっ……うう」

見かけない女の子が半べそかいて座り込んでいた。

滑り台の裏側の日陰のところ、涼しくて居心地が良かったのが俺のお気に入りにしていた場所にだ。

白くて細い手で大きな瞳から溢れる涙を何度も健気に拭っていたのを鮮明に覚えている。

「どうしたよ？ コケて怪我でもしたか？ それか誰かに叱られたのか？」

「え……あ、あの？」

なんで声を掛けたのか？

深い理由や意味なんてない。

可愛かったからだ。

「ほれ！ これやるから元気だせ。おまえ可愛いから笑ってたほうがモテていろいろとお得だぞ？」

「あ、ありがとう。その、あのね、わたし灰村幸羽はいむら ゆきはっていうの」

「ゆきはだな！ よっしや、おぼえたぞ！ 俺の方は乱丸らんまるってんだ。朱里乱丸しりらんまるな！」

突然現れて、いきなり缶ジュースを投げ渡してきた野猿みたいなガキにきつと彼女は大層驚いていただろう。きよとんとした可愛い顔をいまでも思ってる。

「乱丸くんだね……うん、わたしも覚えたよ。ジュースありがとね、すぐくおいしいよ」

「そうだろ！ ラビットたんジュースっていうんだけど、俺はコーラやカルピスよりもこれが最強だと思ってる」

我ながらあの日の自分の言動は本当にバカ丸出しだったと思う。だけど、ユキちゃんはそんな品性の欠片もないようなバカ猿の言う言葉をとても面白そうに聞いてくれていた。

しつとりとした長い黒髪と道端のアリもよくに踏めないような穏和で優しそうな感じのする女の子。まるで深い森のお城のお姫様のような彼女と俺の最初の出会い。

それから、ぽつりぽつりと話をしている間に俺は彼女が引越してきたばかりで迷子になってしまい、さらには体調が悪いと言うことを知ると彼女の返事を聞くことも待たずにユキちゃんをおんぶして交番まで運んでいった。

いまやったら誘拐一步手前な俺の迅速な行動のお陰で彼女は無事にご家族に再会することができて、その足で病院へ行き大事には至らなかった。

後から彼女のご両親から聞いた話だがユキちゃんは生まれつき体が弱く、海良に引越してきたのも静養に適した環境だったからだと言う。

次にユキちゃんとお会ったのはそんな出来事から一週間後のことだ。

新学期、彼女は転校生として俺の目の前に現れた。

「ふふっ、はじめまして……じゃないけど、これからよろしくね乱丸くん。わたしとお友達になってくれますか？」

白いフリルがついた濃紺の可愛らしい洋服を着て、微笑む彼女は春の妖精のようだった。

「友達でもいいけど、恋人じゃダメか？　俺、ゆきはのこと大好きだぞ!!」

そして——俺は本当にどうしようもなくろくでなしのマセガキだった。

だけど、このデタラメな告白でOK貰ってしまったのだから夢のよきな話だ。

こうして、俺と彼女の短い恋人ごっこは始まったんだ。

彼女の命が散ってしまったあの日まで。

※・※ ※ ※ ※

ある日の放課後、乱丸たち三人は海良市の中心部にある歴史博物館に立ち寄っていた。

無論、見学に来たわけではない。彼らはこの海良歴史博物館のアルバイトという偽りの身分を活かしてバックヤードへ入っていき、地下へと続く専用のエレベーターに乗り込む。

何を隠そう封魔結社L O T海良支部の本拠地は博物館を隠れ蓑に建造されている。

黒い軍服に袖を通した職員たちが行き交う通路を我が家のようになれた様子で進んで三人は支部長が陣取る執務室へと入っていった。

「失礼します。黄瀬小太郎以下三名、到着しました」

「うむ。急に呼び出して悪かったな。まあ、座れ」

三人組のリーダー的存在である小太郎を先頭に部屋に入ってきた三人を迎えたのは山のように大柄で武蔵坊弁慶もかくやといった風貌の禿頭とくとうの男性だ。丁寧に手入れされた口髭が支部長という威厳を際立たせているようにも見える。

他の封魔司書同様に黒い詰襟の軍服を着ているが、ボタンが全て締め切っておらず、その大胸筋は窮屈そうに大きさを主張している。肉が詰まったその五体は肥満に非ず、これ全て筋肉達磨なのだから驚きだ。

彼の名は黄瀬寛太きせ かんた。

海良支部を束ねる頼れる支部長であり、名前からも分かるように小太郎の実の父親でもある。あまりの似てなさ加減に首を傾げる者もいるが小太郎は母親似なのである。

「お疲れッス大将！ 相変わらず縁起の良さそうな頭してるッスね！」

「こら乱丸、支部長の前だろ？ 礼儀！」

「おじ様、お仕事お疲れ様です。お話の前にお茶淹れちゃいますねー。美味しいお茶菓子買ってきちゃってますので♪」

「ちよつ……もう、桃奈まで一応任務中だよお？」

親子であつてもL O Tの封魔司書として活動中は決して私情は挟まないと意思表示するかのようになり詰めた佇まいに努めていた小太郎だったが両隣りの親友と恋人は完全に友達の家遊びに来たかのような砕けた態度なもので窘めたり、脱力したりと忙しい。

「だつはっは！ いいじゃねえか小太郎。今更、恭しく振舞う仲じゃねえだろうに。桃奈ちゃん、封切ったほうじ茶のパックがあるからソレ入れてくれ！」

「かしこまでーす」

「あーもー！ 父さんまでそういうノリだから、僕が口うるさくしてるんですよ？」

「すまん、すまん！ お前がしつかりしてくれるお陰でつつい甘えちまう」

まるでお笑いトリオのような三人のやり取りに寛太はビリビリと震えるような大笑いをして、窮屈にしていた胸元を肌蹴ると雰囲気は軟化させる。

「勘弁してくださいよ。将来髪形だけ父さんに似るとか僕は絶対に嫌ですからね」

「俺はハゲじゃねえ、剃ってんだよ！ なんだあ言うようになったじゃねえか!!」

L O T海良支部に所属する封魔司書たちは古くからこの土地に暮らす者が多い。

その中には黄瀬家と朱里家のような親族同士であつたり月島家のような海良とは別の支部にも所属している者がいたり何世代も前から組織に所縁ある者たちで溢れている。

例えるならば規模の大きな家族経営。文字通りにアットホームな職場、それが海良支部の一つの特色だった。

「さて、冗談はこれぐらいにして本題に入るか。菓子食いながらでいいから聞け、ちと良くない報せだ」

「厄介な戯我でも現れたのか、大将？」

「いや。戯我の退治も大切だが遺^{ロスト・テクノロジー}物絡みで少しな……磐戸市と

「いう町を知っているか？」

「気を取り直して、寛太は三人を執務室のソファ―に座らせると話を切り出した。」

「彼が口にした地名に聞き覚えのあった桃奈が口の中の大判焼きを慌てて飲み込んで答えようとする。」

「確かそこにもLOTの支部がありましたよね？ 噂だと私たちと同世代の子が霊装持ちでいるとか聞いたことがありますけど」

「ああ。その磐戸市の管轄内で裏組織の人間と思われる男が遺物を用いて随分と羽目を外そうとしたらしい水晶髑髏の贋作に――将門公の骨まで持ち出してなあ」

「寛太の口にした言葉に乱丸たちの顔色があつという間に緊張で張り詰めた。」

「かの新皇の逸話は封魔司書でなくとも少しでも歴史を学んだことがある人間ならば畏敬の念を感じるそれほどまでに大きな存在なのだから。」

「――それで街はどうなったんで？ 大惨事か？」

「幸いにも下手人共の不手際と磐戸支部の尽力もあつて被害は最小限で抑えられた」

「よかった。その支部のライダーは相当な実力者みたいですね」

「俺も負けてらんねえな」

「小太郎の安堵した呟きに残る三人も頷く。」

「そして、乱丸は名前も顔も知らない同世代の霊装持ちに親近感と同時に激しい対抗心を燃やしていた。高校生程度の年齢でそんな難局を凌ぐだけの手練だ。難しい話だとは思うがきつと肩を並べて戦うだけでも学べることは多いだろうと。」

「憂慮せねばならないことはそんな危険な代物が何品も国内に密輸入されてしまっていることだ。将門公の遺骨の出どころにしても、売人たちの尻尾を掴むのも勿論だがこの海良にそんなものをポンポンと持ちこまれるわけにはいかん」

「父さ……支部長、そういうことなら巡回ルートと人員の再編成をした方が良いと思うのですが」

「それに遺物や違法バイヤーたちの動向も警戒しなくちゃだけど、遺物の気配を嗅ぎつけた戯我たちにも注意しないとイケないんじゃない？ 高い知能を持った個体なら遺物を悪用することだってできちゃうよ」

「小太郎、俺は暫くソロで動くからお前は新体制が落ち着くまで遺物の方に集中してくれ。お前が現場でまとめてくれればずっと効率が良い」

「ありがとう。乱丸には負担かけるけど助かるよ」

寛太からの報告を聞かされた三人は自然と様々な事件ケースや危険な現象のパターンとその対策案の意見を出し合い相談して事前策のプランを提言していく。

スイッチが入った瞬間に顔つきが変わった乱丸たちはすっかり封魔司書としてその場にいた。

「景火^{けいか}のやつが別件を片付けて海良に戻って来るまでもう暫くはかかる。若いもんに頼りきりになるのは酷なことだが戯我相手にはいまはお前だけが頼りだ。任せたぞ、乱丸」

「応ツスよ！ 荷が重い方がやる気がでるってもんですよ！」

寛太の飛ばした激励に乱丸は胸を張って力強く答えた。

こうして始まった即席のミーティングはそのまま参加可能な各班のリーダーたちも集まってもらい外が暗くなるまで続いた。

海良支部に所属している封魔司書の誰もが海良^{このまち}の飽きるほど見慣れた平穏な姿を守りたいと強く思っていた。

だが、そんな彼らの尽力とは裏腹に既に某国某所から実に稀有な遺物が海良市に持ち込まれていることをまだ誰も知らない。

※・※ ※ ※ ※

月明かりが眩い夜の世界をみすばらしい恰好の男が彷徨っていた。

男は俗に言う浮浪者／ホームレスという身分の人間だった。

仕事は長く続かず、酒と博打で金も家族も何もかも全て失い、うだつの上がない日々を繰り返す人生の落伍者。

高架下に勝手に築いたダンボールハウスは撤去され、夜露をしのげる場所はないかと徘徊していた末に男は雑木林の一角にぽつんと取り残された廃墟を見つけた。

屋根がある建物なら、汚くても臭くてもなんでもいい。

夜の暗さと寒さから逃れられるのなら、男は深く考えもせず、その廃墟へと飛び込んだ。

廃墟はパチンコ屋か何かだったようで遊戯台の全ては撤去されていたこともあり、外観から想像していた以上にがらんどろとしていた。

天井もところどころ破損していて、隙間風や月光が差し込んでくる有様だがおよそ社会の最低辺まで転落したこの男にはもったいないぐらいの優良物件だ。

警察か役所の人間にバレるまでは絶好の住まいが手に入ったとほくそ笑んでいた男はそこで見つけてしまったのだ。

明らかに場に不釣り合いな棺のような大きなガラスケースとその中に入っている美しい人型を。

「人形か……？」

もしも死体だったら最悪だと駆け足でガラスケースに近付いた男の口から自然と声が漏れた。真つ暗な廃墟の中だったが偶然にかそのケースが置かれた周囲だけは天井に空いた穴から届いた月の光で明るさがあつた。

「きれいだな」

薄汚れた身なりの中年男性からはまるで少年のような飾らない無垢な言葉が出た。

それほどまでに目の前にある眠り姫のような人形は綺麗な見た目をしていたのだ。

異国の碧海を思わせるような翡翠色をした長い髪に陶磁や石膏像にも勝る白く艶やかな肌。目鼻立ちはすっきりとしていて淡くそれでいて鮮烈なまでに美しい。

男の知識には無いがキトンと呼ばれる古代ギリシャにあつたときされる白い衣服で身を包み、大きな巻き鍵を両手で大事そうに抱いてい

る。

「きれいだな……ぐっ、うう……ああ、きれいすぎて泣けてくる」

童心に帰ったように男は謎めいた眠り姫の美しさに感激して涙を流した。

平時の男ならば物好きが捨てたラブドールダッチワイフか何かか？と下卑た思考と卑屈な情欲を剥き出しにしていただろう。

そんな不埒な煩惱を吹き飛ばすほどの美しさがその人形にはあったのだ。

ケースの中央部分には金色のプレートが付けられてそこにはガ■
■ア・■プ■カと所々文字が削れながらも銘があったのだが男の教養ではその正体は理解できなかった。

「もし——その旦那様」

言葉も忘れて男が人形に見惚れて十分以上が経った頃のことだ。

ぱちりと人形の瞼が開き、トパーズのような煌めく瞳がこちらを見つめ、確かに男に喋りかけてきた。

「いますぐにこの場から立ち去ることをおすすめて致します」

ずつと夢を見ていたのか？

男はそう我を疑うしかなかった。

頭が真っ白になって人形が尚も何かを喋りかけているようだったが何も入ってこない。

だから男は外から真っ直ぐに廃墟の中へと入ってきた大きな足音にも気付くことはなかった。

「旦那様。命が惜しいようでしたらすぐにお逃げすることをおすすめ致します」

ズシン！ズシン！とコンクリートの床を揺らしてアレが帰ってきてしまった。

びしゃ！びちゃ！と臭いの消えた血だまりを踏んで近付いてくる。

ゴソゴソ！ゴソゴソ！と地を這うような無数の取り巻きたちの気配もあった。

「旦那様。お逃げください。私はいわるゆ撒き餌のような物でござい
ます。旦那様——」

ぐちやあつ!!

——ああ、間に合わなかった。

篝火の炎に誘われる羽虫のように、ここに迷い込んでしまった新たな旦那様候補の男性は私をここまで持ち運んだ危険な香りの殿方たちと同じようにこの巨岩の魔人に踏み潰されて見るも無残な肉塊になってしまった。

「エモノがまたキタナ。イイものを拾った。このグチャグチャは何度ヤツテモたのしいぞ」

「チュキキ！ いやあく親分の踏みつけは何度見ても惚れ惚れするぜ」

大きな異形と小さな異形が笑っている。

もう何人の人間が彼奴の食事になってしまったのだろう。

そうして、色彩を貪り尽くされ亡骸もこの世に残すこと許されず死に絶える。

まさか、当世においてもあの怪物たち……ギガが存在していることには驚きました。

しかし、それ以上にいまは……かつてと同じように私のせいで誰かが命を落としていく。

汝に罪無しと言われようともこの身が火種となって散っていく命を見つめることしか出来ない我が身が恨めしく思います。

渡り鳥のように自由に羽ばたけたのなら。

駿馬のように大地を駆けることができたのなら。

人間のように気ままに世界を旅することが叶うのなら。

彼らのようにこの透明な檻から逃げるだけの力と意気地があるのなら。

否、私は——。

※・※ ※ ※ ※

夜道をサクサクと歩く制服姿の乱丸は片手にコンビニで買ったカップ麺の入ったビニール袋を下げながら『あけさと酒蔵』という看

板が掛けられた歴史ある日本家屋の玄関扉を開いた。

海良支部での今後についてのミーティングを終えて自由になった乱丸は自宅へと帰宅していたところだった。

本来なら封魔司書は有事に備えて各支部の施設に併設された地下住居区画で生活をするのだが家族ぐるみでL O Tの関係者であることも珍しくない海良支部の特色ゆえか乱丸のようにT P Oに応じて二カ所を使い分けている封魔司書も存在するのだ。

「たっだいまー！ 悪い兄ちゃん、ちよつとミーティングが長引いちやつてさ」

「やあ、お帰り乱丸。うん、今日も何事もなく終わったようでは何よりだよ」

大きく伸びをして体をほぐしていた乱丸の出迎えたのは杖をついた袖姿の青年だった。

端正で柔和な雰囲気を選び、乱丸に大人の余裕を足し加えたような青年の名は朱里あけさと錬馬れんま。乱丸の実兄であり、かつてのシラヌイの変身者であった男だ。

数年前に戯我との戦いで重傷を負い第一線を退くのを余儀なくされてからは朱里家の家業である酒屋——を隠れ蓑にしたL O Tの諜報部隊を支援する任に就いている。

二人の両親も存命だがいまは海外にある支部に配属されているので顔を会わせる機会は少なくなっていた。

「そりゃあ、今日は戯我とはやりあってないからな。けど、大丈夫だよ兄ちゃん！ 俺も相当やるようになってきれるから！ 化け物相手に油断も遅れも取らないぜ」

「そうだったね、お前はよく頑張ってるもんな。えらいぞ」

「だろ？ もつと褒めてくれー！ ついでに今月の小遣いの帳簿誤魔化すのを見逃してくれー！」

「それはダメ」

「うっへええ!？」

家族にだけ見せるただの恋愛沙汰が大好きなだけのやんちゃな少年の顔を覗かせる乱丸の頭を錬馬は労うようにわしゃわしゃと撫で

る。

乱丸と鍊馬は十五歳も年齢が離れた兄弟だがその歳の差のせいかに親子や悪友のような距離感で大きな喧嘩もすることなく仲のいい関係が続けている。

「腹減っただろう？ 僕もまだだから鞆を置いたらすぐにおいで」

「今日は俺ら二人しかいないんだから先に食っててくれてもよかったのに。悪いがこのラーメンは分けてやんねえぞ？」

「あ、ああ……そのだな乱丸。実は……」

「騒がしいと思えば、帰りましたか乱丸。お勤めご苦労さまです」

ドヤ顔で夜遅い時間のラーメンを食する宣言をする乱丸に気まずそうに何かを言いかけた鍊馬だったが彼が何かを喋るよりも前に乱丸の前に朱里家の影の主が姿を現す。

「へ……あ、あ、義姉上!? なんでえ？ 今日夜勤だったはずじゃありませんでございまする!？」

「同僚の〴〵家庭の都合でシフトを交代したのです。久しぶりに家族三人で夕飯を囲めるので嬉しく思いますよ」

「仰るとおりです」

「目上の者に敬語は言い心がけですが何時も言っているように私たちは家族なのですからもっと砕けた口調でも構いませんよ？ その呼び方も悪くありませんがそろそろお姉ちゃんと呼んでくれてもよいのではないですか乱丸？」

家の奥から現れた艶のある黒髪と緋色の瞳が印象的な冷淡で麗しい容姿の女性を目の前にして乱丸はふざけているのかと思いたくなくなるほど動揺して震えあがってしまった。

彼女の名前は朱里のどか。

海良総合病院に勤務する現役の看護師にして鍊馬の妻であり、乱丸にとつては義理の姉に当たる人物だ。

「ところでその手に持っているものはカップ麺で相違ありませんね？」

「は、はあ……その帰宅の時間が遅くなってしまったので食事よりも睡眠を優先した結果の産物でございますです。はい」

「インスタントラーメンが悪いとは言いません。味も美味しいですし、私も多忙の際は食べることもあります。ですが乱丸、あなたの立場を考えれば栄養のある食事と健康を疎かにすることはよろしくないことだとは思いませんか？」

「その通りだと思います。はい」

忌憚のない正論が下心だらけだった乱丸をブスブスと突き刺していく。

のどかは学生時代は文武両道の才女として有名で高校在学時には生徒会副会長を二年間に渡って務めたことで影の女王、冷笑姫などの異名を持って畏れられてきた女性だ。

なによりも過去の出来事が切っ掛けで乱丸がこの世で一番頭の上からない存在であった。

「あー……たはは。ねえ、のどか。乱丸も疲れてるだろうし、それぐらいにしてあげなよ。今度僕からもキツク言っておくから」

「でしたら何故、乱丸を出迎える時に何も言わなかったのです錬さん」「うっへえ？　そ、それはだね……えーつと、この話も大事だとは思いますが先に夕飯にしないかい？　せっかくのどかが用意してくれた食事が冷めちゃうのは僕は悲しいよ」

戯我と対峙するよりも桁違いに恐怖で縮こまっている乱丸が流石に哀れに思えた錬馬が助け船を出すが無事にも墓穴を突かれてあべこべに言い負かされそうになる有様だ。

そこで錬馬は少し情けないが惚れた弱みに付け込むわけではないが真剣な眼差しと熱く優しい抱擁を添えて彼女を説き伏せようと試みる。

「……ッ！　ま、まあ一理ありますね。お説教が長引いてこれ以上遅い時間に乱丸に食事を摂らせてしまっても本末転倒ですし……では乱丸」

「は、はい!!」

「今日はこれ以上は何も言いません。ですのでお互いに気持ちを切り替えて一緒に夕食を食べましょう」

愛する夫に抱きしめられたのどかは彼の魂胆を見抜きながらも、ナ

ンセンスではない言い分もあつて可愛らしい咳払いを一つして乱丸を許すことにした。

「ありがとうございます。反省してます」

「期待します。先日、退院された患者さんから天然のきのこを沢山いただきましたので今夜はきのこ鍋ですよ。鳥団子も作りました」

「おおー義姉上の肉団子って美味しいんですねー！　すぐ着替えて戻ります」

「……あと、シメは中華麺にしてみましようか。うどんも良いですがそれ以上の食べ合わせが見つかるかもしれませんしね」

ぐったりしながら二階の自室へと向かおうとした乱丸にぼつりと言ったのどかの顔は何とも照れ臭そうだった。それで乱丸も再確認させられる彼女の厳しさには常に理に適った何かと深い思い遣りに満ちているのだと。

「義姉上ええええ！　兄ちゃんの義姉上への愛には負けますけど、俺も大好きですー！」

「お世辞は良いです。早くきなさい。鳥団子が無くなつても知りませんよ？　早い者勝ちですからね、私は明日の夜勤に備えて遠慮なく狙っていきます」

「はい！　ただいま!!」

厳しさと親愛がある家族と支え合いながら朱里家の夜は更けていく。

彼らだけでなく様々な人たちの一日の営みが終わりを迎え、次の明日がやってくる。

※・※ ※ ※ ※

それから数日後のことだ。

あの廃墟がある人気のない雑木林の一角で奴らは無法を働いていた。

「チュヒツヒツヒ！　バカな人間どもだ！　ここが俺らの庭だと知らなかったと見える」

「活きの良いガキだぜこいつは！ 最近は飯の種には困らなかつたが挽肉見たくなつた人間の色を貪るのは味気なかつたからな!!」

「良い声で喚く玩具もついでいて最高だぜ!!」

焼けるような眩しい西日が焦げ黒い異形の皮膚を照らす。

尖つた前歯と鋭く長い爪を持つた赤い双眸が不気味な巨大な旧鼠の戯我。

ゴ布林・ギガやコオニ・ギガなどと同じく下級に属されるキュウソ・ギガの集団が老人と孫と思われる幼子を取り囲んで卑しい笑い声を上げていた。

「お、お願いします！ どうか孫の命だけはお助け下さい。わしの命を差し上げますから何卒孫だけは……孫だけはっぐああああ!!」

「誰が俺たちに喋りかけていいなんて言つたよ？ テメエが口にしていいのは悲鳴だけだぜ老いぼれえ!!」

身を盾にして孫を守りながら這いつくばつて懇願する老人をキュウソ・ギガたちは容赦なく乱暴する。一瞬で殺してしまわないように力加減をして、長く苦しませ痛みに苛まれるように非力な爺を寄つてたかつて足蹴にしていく。

「やめてえー！ おじいちゃんにひどいことしないで！ うう……うわあああっ！」

「キツヒヒヒ！ それじゃあ仲良くお前にも酷いことをしてやろう。感謝するんだぞお人間!!」

「ごほっ……ぐう、待つて！ 頼む、殺すならわしだけに！ がっはっ!?! ま、孫の命は……許して、くれえ」

既に足の骨を折られ、傷だらけの泥塗れになりながら情けを乞う老人からキュウソ・ギガたちは孫を取り上げると侮蔑と嘲笑を浴びせて、暴力を加える。

大好きな祖父が理不尽な仕打ちを受けることに悲しみ泣き叫ぶ幼子の悲鳴を肴に戯我たちは更なる悪趣味な催しを話し合い始める。

「興が乗ってきたぞ！ この老いぼれの目の前でこの小僧の色を啜つて食つてやろう」

「面白そうだなあ。なるべく生かしたまま俺たちの前歯で腹を食い

破って、腸を吸い出してやるのは愉快だと思いがどうだ?」

「いやいや、むしろこの爺の手足を適当にもいでこの近所の野良犬なり獣に食わせる姿をガキに見せる方が面白からう」

まるで無邪気な子供が昆虫や蛙を好奇心で惨殺するような残酷な行いを明確な悪意と卑劣な思考で企てる。

これが戯我だ。

人間を嘲り、玩弄し、何の躊躇いもなく殺めて命と色彩を貪る下卑たる異形たち。

けれど忘れるな。

か弱き人を守るために、この悪意を煮詰めたような異形たちを調伏する術を会得した者たちがいることを。

長い歴史と研鑽を経て勇氣と叡智で鍛えた抗うための爪牙を身につけた人間たちがいることを。

「ウオオオオオ！ 散れ散れ散れッ！」

幼子の泣き声と老人の悲鳴、戯我の下衆笑いを纏めて吹き飛ばすエンジン音が轟いて、直線一気に駆けてきた鋼の車体がキュウソたちを散らした。

豪快にハンドルを切る乱丸は片手で軍服に忍ばせたチャクラムと景気良く何枚も投擲して牽制を行う。

封魔司書たちが携行する専用端末Aガジェットが変形したマシン・アーティファイナル

A ストラライカーに乗った軍服と猿の面で身を包んだ乱丸が駆け込んできたのだ。

「戯我の被害者のじいさんとチビすけを保護！ 怪我が酷い。救護を頼む！」

『分かった。急いで後続のみんなに手配させるね』

A ストラライカーから飛び降りて子供を自分の後ろに隠した乱丸は迅速にオペレーターを担当する桃奈に支援を要請しながら戯我の群れと対峙した。

「チキショウ！ その恰好……封魔司書だな!？」

「お楽しみを邪魔しやがって！ ぶっ殺してやる!!」

「奇遇だな。俺もお前らをぶっ潰したくて仕方ねえんだ」

猿面の下でキュウソたちの乱暴狼藉への怒りで血管を浮かび上がらせながら、臨戦態勢の乱丸もレリックドライバーを装着する。

そのまま二種のモンスターキッドをドライバーに装填する。

サルファアーイエローとスモークキーホワイトの二色だ。

「お前らに絶景なんてもつたいない」

《ブランド》

《ハヌマーン》

「一秒でも早く閻魔様のところに送りつけてやるよ！」

《Loading Color! HYBRID!》

「変身!!」

《BRUSH-UP! 交わる双つの色彩! ハイブリッドカラー

!》

乱丸がトリガーを引き込むと以前とは一色だけ異なった二つの五芒星が頭上と足元に展開されて砂塵を巻き起こして乱丸を仮面の拳士に変える。

姿を露わにしたシラヌイはヒートハヌマーンの姿に似ているが紅蓮の赤だった各部の装甲が岩石のように角ばったデザインに変わっていて、色調も濃い黄色になっている。

これは亜種形態のブランドハヌマーン。

シラヌイが所持しているモンスターキッドの組み合わせによるバリエーションの一つだ。

「す、すごい……ヒーローさんなの?」

「ちよつと違うな。俺は愛の戦士つてやつだ」

目の前で仮面の戦士に変貌した素顔を隠した乱丸に子供は怯えながらも好奇心に動かされてか細かい声で尋ねた。その問いかけにシラヌイは得意げに握り拳を右胸にぶつけて言い切った。力強いその声が子供の心を蝕む戯我への恐怖を少なからず吹き飛ばしたのは言うまでもない。

「ここからお前は俺が全力で助ける! お前はお前のじいちゃんを守ってやれ。そばにいて励ますだけでいい。もうすぐ人が来るから、それまでがんばんな」

目撃者の一般人との交流は極力控えることが暗黙の了解ではあるがシラヌイは涙で腫れた幼い瞳で自分を見る子供に威勢よく言つて聞かせると荒ぶる闘志を剥き出しにしてキュウソの群れに飛び掛かっていった。

「キエエエエエエエツ!!」

「うぎゃっ!」

夕焼けの太陽に晒されて山火事のような真紅で染まった雑木林をけたたましい追いかけてつこを繰り広げてシラヌイとキュウソ・ギガたちの戦いは激しさを増す。

ドブネズミ同様に素早く機敏に動きまわる敵たちをシラヌイは枝の合間を跳び回って急襲する。

「キヤアアアオッ! くたばれ!!」

「い……ぎああ?」

木の上からのしかかるように仕掛けて背後を捉えた一体のキュウソの脇腹を左籠手からせり出した二本の鉤爪で容赦なく刺突する。

あつという間に四つの風穴を突き破られたキュウソの傷口から血のようなインクが漏れ出して苦悶の声を上げる。

大きな隙を晒した好機を逃すはずもなく、シラヌイはそのまま左腕の鉤爪を操ってキュウソを三枚に捌いて仕留めた。まずは一体目。

「野郎! 取り囲んで袋叩きにしてやれ!」

「罅り殺しにしてやるぜ!」

あつという間に仲間の一人を倒された残りの群れ達は彼らの常套手段である集団戦で勝負を挑む。ぐるぐるとシラヌイの周りを駆け回り、前歯や爪をチラつかせて恐怖を煽っていく。

「定年まで頑張ったじいさんと同じだと思ふなよ」

《グランド》

「急々如律令」

《Callling》

だが、シラヌイは焦ることなくドライバーに装填されたりキッドのスイッチを押して、トリガーを弾く。すると彼の足元から大量の黄色

い砂が溢れ出してあつという間に雑木林の一片に砂地が生まれた。
「串刺し刑だぜ！」

引き起こされた異常事態にキュウソ達は慌ててタイミングも揃わないまま飛び掛かるも一手先を読んでいたシラヌイには届かない。

あべこべにシラヌイが操る砂が生き物のように動きだし、剣山のように変形した鋭い針先で多くのキュウソがまとめて針山地獄に落とされたように貫かれる。

「な、なんてこった……これっぽちの数じゃ勝てねえぞ?!」

「キイイエヤアアアアアアアア——!!!」

「ひいひいっ!?!」

流砂を操り攻防一体の戦法を繰り出したシラヌイに味方を半壊させられて怖気づく残ったキュウソ・ギガたちに地獄の呼び声のような猿叫が浴びせられる。

「キキイイイイッ! キヤアアアアアアアオオツ!!」

猛獣の雄叫びよりも獰猛で、猛禽の鳴き声よりも鋭い猿叫が戯我たちに恐怖心を植え付けていく。

これがシラヌイの——乱丸とっておきの戦術の一つだ。

どんなに強靱で逞しい動物でも恐怖に苛まれば、心は掻き乱され正常な思考を巡らせることは難しくなる。

「キヤアアオツ! キヤアアオツ! キヤアアアアアアアオオツ!!」

「うぎゃあああ?! お、お前なんて……人間なんて怖くねえぞ……っ
!」

戯我たちの声が震えている。

奴らはシラヌイに恐怖を覚え始めている。

そうだ。戯我共の認識を塗り替えるんだ。

「ウオオツキヤアアアアアアアア——ツ!!」

「ひいひいひい! や、やめろ……その叫び声をあげるんじやない
いっ!」

恐怖で思考を塗り潰せ。

彼らにこの怒りが人間のそれであると思わせるな。

戯我が人間を弱きものと見下すのなら、奴らが恐れる何かに化け

ろ。

この世で唯一のお前たちの天敵が剥き出しにしている怒りだと錯覚させろ。

嵐のような激情を浴びせろ。

火炎のような憤怒に晒せ。

さあ、いくぞ。いくぞ、シラヌイ。

仮面ライダ―
天敵による、反撃の時だ。

「ウオオツキヤアアアアアアア——ッ!!」

自らが生み出した砂漠を蹴ってシラヌイが攻めかかる。

それに立ち向かおうとするキュウソはどこにもいない。

先程まで優越感に浸って得意げに老人を甚振り、子供を怯えさせていた世にも恐ろしい怪物の面構えをした戯我は一匹もいない。

鈍い輝きを放つ鉤爪が春風諸共にキュウソの汚れた黒い体を引き裂いたのを皮切りに鉄拳に穿たれ、豪脚に薙ぎ払われてキュウソの群れは総崩れを起こしていた。

「根性ねえな！ いいさ、ネズミ退治もそろそろ閉店の時間といこう」

《ヒート!》

《ハヌマーン!》

「お前ら、最後のお突き合いといこうか!」

《Loading Color! GRADATION!》

戦いに幕を引くべくシラヌイはドライバーからグランドのモンストリキットをヒートの物へと挿し替えると呼吸をするような馴染んだ動作で再びトリガーを引いた。

「カラーシフト!」

《BRUSHUP!》

大きくジャンプしたのと同時に出現した上下二重の五芒星にその身を通わせて、シラヌイは跳躍移動中にフォームチェンジを完了させる。

《悪鬼を砕く灼熱の魔拳! ヒートハヌマーン!》

『キキイイイイ——ッ!』

烈火を纏って姿を変えたシラヌイはAウエポンXを握ると基本と

なる棍の状態のまま激しく回転させてキュウソ・ギガの残党に突っ込んだ。

「ウキヤキヤキヤキヤアアア——!!」

一振り、二振りと渾身の膂力で操るロッドで薙がれたキュウソ・ギガたちにダメ押しとばかりにシラヌイは暴風のような乱れ突きを叩きつけた。

当の昔に戦意喪失していたキュウソ・ギガはまるで型貫きにかけられたかのように均等に穴だらけになったかと思うと水風船が破れたように大量のインクと撒き散らせて一蹴されたのだ。

「よしと……気をつけて、一体には空振りしておいたはずだけど」

ゆつくりと爆発とインクの飛沫で視界不良だった周囲の景色が晴れていく。

だが、勝利したはずのシラヌイは何故か変身を解かずに周囲をきよろきよろと探索していた。

「お、みつけ。桃奈聞こえるか？　これから連中の巣を叩く。強めの索敵よろしく頼んだ」

『はいはい！　お掃除タイム、はりきつていこー!』

少量だが微かに地面に零れ落ちてどこかへと続いているインクの痕跡。

下級戯我は他の実力がある戯我と結託して悪事を働く傾向が高いという習性を心得ていたシラヌイは敢えて全滅を避けて、背後関係を探るために一体だけ逃がしておいたのだ。

思惑の罠が功を奏して、逃亡先と続く痕跡を発見したシラヌイは桃奈のサポートを受けながら追跡を開始した。

※・※ ※ ※ ※

「ハア……ヒイ……封魔司書があんなに強いなんて聞いてねえぞ」

その頃、生き残った最後のキュウソ・ギガはシラヌイの予想通りに寝ぐらであるあの廃墟へと逃げ帰っていた。しかし、廃墟には頼れる腕自慢の仲間は不在で何もいない。

「くそ……あのウドの大木は土に埋もれて寝てやがるのか！ それじゃあ夜になるまで起きねえぞ!? 仕方ねえ、人間どもが寄ってくる飯の種だけでも抱えて……アレエ!」

間抜けな大声がひんやりとしたコンクリートの広間に反響した。

下手に大きな物音を出せばあの封魔司書に気付かれてしまうと分かっていたのにキュウソが直面した想定外のトラブルはそれほどまでに重大だったのだ。

「ど、どどど……どこにいった!? なんでない!? 一体どうして……!」

「良いところに住んでるじゃねえか。俺の部屋よりずっと広いな、羨ましいぞ」

「ひっ……ひえええええ!」

予期せぬ事態の連続で泣き喚きたくなくなっている心境だったキュウソの背後から天敵の声が聞こえてしまった。シラヌイが追いついたのだ。

『乱丸くん、その廃墟にも周辺にもそいつ以外におかしな反応は無し。少し意外だったけど、そいつが最後までだよ』

「別種の仲間がいると思ったがネズミ共が集まって強気になってただけとはな。夢の国でも作る気だったのか?」

「クウ……ウウ! チュアアア!」

薄暗い廃墟の中で爛々と輝くシラヌイの緑の双眸がブレることなくキュウソ・ギガを一点に睨みつけている。

文字通りの窮鼠となったネズミの怪物は足を震わせながら自棄になつて襲い掛かるがシラヌイはそれを難なくいなして足払いを仕掛ける。

「キャオツ!」

「ぬぎゃああ!? う、腕がああつ!」

尻もちをついて転んだキュウソを蹴り上げるとその体が宙に浮いた。

間髪入れずに繰り出された急角度からの回し蹴り。脚撃と共にシラヌイの踵に仕込まれていた暗器の一つである隠し刃が異形の片腕

を寸断して見せた。

「終わりだな。地獄行きの特急便に突っ込んでやる」

「ま、待ってくれ！ 頼む、もう人間を襲ったりしない……改心してお前らL O Tの小間使いでもなんでも協力する！ だから、命だけは見逃してくれ!!」

深手を負い片足を掴まれて、シラヌイに逆さ吊りのように持ち上げられたキュウソ・ギガは情けない声で命乞いを始めた。シラヌイが無言で睨みつけたまましているとキュウソは早口で喋り続ける。

「へっへっへ……戯我の協力者なんてお前ら封魔司書にとつても魅惑だろう？ 知ってる限りの他の連中のたまり場だつて教えてやるよ。間者の真似事だつてなんだつてやる……どうだ？ 悪い話じゃないだろう、俺を生かしておくっていうのはよ?」

「……俺の答えを聞きたいか?」

卑屈に口元をにやつかせて、自分を売り込むキュウソにシラヌイは抑揚のない声で呟くと破邪の意思を示す言葉を唱えてドライバーの引き金を絞る。

《ヒート!》

「急々如律令」

《Callling!》

仮面の口部がゆっくりと開き、焼けた鉄を想起する光と溶鉱炉のような熱気が溢れ出す。そして、命拾いを期待していたキュウソにシラヌイの凜猛な戦意がぶつけられる。

「失せろつてんだよ」

「ぎいあゝ ああああああゝ あゝ あああああつつ!!」

シラヌイの開かれた口部から放たれた紅蓮の火炎が至近距離にいたキュウソを飲み込んだ。

白猿の咆哮を思わせる怒涛の如き灼熱の息吹はあつという間にキュウソをインク一滴も漏らし残さず消し炭へと変えて、完全に戦いの幕を閉じた。

「どんなに益があろうが仲間を売るような奴を信じる気はねえよ」

誰もいなくなった廃墟で空になった左手を握り締めながらシラヌ

イは吐き捨てるように呟いた。

「……………()本当にあいつらだけの巢か？」

今度こそ完全に敵を全滅させたシラヌイではあったが何とも言えない違和感に首を傾げながら廃墟の中を見て回るとすぐに自分が抱えていたモヤモヤした不安が杞憂でなかったことを確信する。

「乾いた血だまりに、脱ぎ散らかったスーツが数着分……それに棺桶みたいなガラスケース、大当たりじゃねえかよ」

シラヌイが見つけたものはこの廃墟で誰かが戯我に惨殺されたのちに色彩を食われたと思われる痕跡だった。更には不法投棄されたものとは考えられない華美なガラスの棺。

間違いなくここで遺物に関連した闇取引なり、商談のような由々しき事柄が起きていたのだと確信した。

「桃奈、支部長に繋いでくれるか？ たぶん、遺物絡みの厄介ごとだ」
『ホントに!』

「詳しく調べてみないとハッキリしないけど、残念なことに遺物そのものを持ち込んだ連中たちは戯我の腹の中だろうな。それに……」

桃奈と通信を交わしながら他にも何か手掛かりがないかと廃墟をうろついて回るシラヌイだったがふと足を止めて心底不思議そうに一番謎なことへの気持ち吐露した。

「中身はどこいった？」

キュウソが驚愕して、シラヌイもどれだけ廃墟を探しても見つからなかったもの。

ガラスケースに眠り姫のように安置されていた美しいあの人形と思われていた少女がどこにも見当たらなかったのだ。

※・※ ※ ※ ※

夕闇に包まれた海良の寂れた路地を外套のように檻樓を纏って、異国情緒に溢れた少女は一人歩いていた。足取りは弱々しく、歩調は迷い猫のように曖昧だ。

けれど、ボロ布からちらりと覗く翡翠の髪や芸術品のような美貌は

麗しく彼女を一目見た者は夜闇に舞い降りた天使か妖精と勘違いしてもおかしくはないだろう。

「最後に目覚めた時と比べると人の街は随分と発展したのですね。それに……スンスン、ここは異国なのでしょね。遠くから感じる海原の香りも彼ら人の暮らしもギリシヤやイタリアとはまるで違う」

生い茂った木々のように何棟ものビルが伸びて狭苦しい星空を見上げて少女は気だるげな声を漏らす。

「ジパング……東洋の最果て。流れ流れこんなところまでできましたか」

満月にも負けない煌めきを宿したトパーズの瞳に海良の街並みを映しながら、少女は力が抜けていく体をしずかに薄汚れたビルの壁にもたれさせた。

「思い切って逃げ出したのは良いもの……これからどうしましょうか。このまま朽ちてただのガラクタになってしまった方がスッキリするのもかもしれませんね」

自分と言う存在がいつも人々の間で争いを生むことになった。

自分と言う存在がどこかで必ず誰かが血を流す悲しい出来事を招いてきた。

古代の王の無限の愛と神の御業とに迫ろうと海よりも深い愛を何人もの人々に注がれて今に至る自分だがここで終わってしまったもいいんじゃないかと少女は空虚に考える。

「私にとっての旦那様ビッグマリオンなど、いるのでしょうか？ 私のような■■■になんて」

進むことにも億劫となった少女はぺたんとその場に座り込み、愁いを帯びた表情で夜空を見上げた。その頬や指先には亀裂のようなヒビが入っていた。